

長雨・日照不足及び低温に関する農作物等の技術対策について

令和3年8月15日
山形県農業技術環境課

県内では、8月中旬頃から、曇りや雨の日が多く、気温の低い状況が続いています。今後、天候は回復傾向となる見込みですが、日本列島に沿って秋雨前線が停滞する予報であることから、天候の変動が予想されます。

つきましては、今後の気象情報に留意し、下記を参考に対策を徹底してください。

1 共 通

- (1) 日照時間が少なく、湿度が高いため病害の発生が多くなることが予想される。圃場の観察をこまめに行い、発生状況に応じた適切な防除対策を講じる。また、防除に当たっては、使用基準を遵守するとともに周辺作物等に飛散しないよう十分に注意する。
- (2) 大雨による浸水・冠水に備え、暗渠や排水路の点検・補修を行うとともに、明渠を整備して速やかな排水を図る。

2 稲 作

- (1) 低温・日照不足で登熟が緩慢になり、千粒重の低下が懸念される。こまめな間断灌漑を行い、稲体及び根の活力を維持して登熟を促す。また、出穂後30日間は水を切らさないで、登熟後期まで土壌水分を維持する。
- (2) 長雨で穂いもちの感染・発病が多くなることが予想されるため、薬剤防除を徹底し、降雨日が多い場合は、雨の合間を見て防除を実施する。
- (3) 斑点米カメムシ類の発生が多くなっているため、発生状況を確認しながら、薬剤防除の徹底を図る。



イネ:いもち病(平成30年9月)

3 大 豆

- (1) 大雨後、圃場内に滞水しないように、常に水路や明渠などの排水溝を点検し、必要な整備を行う。
- (2) 滞水した場合は、作物体が軟弱化しやすいので、速やかな排水対策を行う。排水後は、地下水位の低下を図るとともに、作業可能になったら速やかに中耕培土で通気・透水性を確保する。その際、株元まで耕起幅を広げず、断根を最小限に止める。
- (3) 子実の肥大が緩慢になることが懸念されるので、病害虫や湿害対策を実施し、早期落葉を抑制する。



大豆:長雨による滞水

4 そ ば

- (1) 速やかに排水し、圃場の整地等の播種準備を進める。播種が8月15日以降になると、登熟期の低温の影響で収量が極端に低下する可能性があることから、なるべく早めに播種を行う。
- (2) 播種直後の降雨や停滞水による湿害は、そばの生育に致命的な影響を及ぼすため、事前の排水対策を徹底する。

5 果 樹

- (1) もも、りんごでは、日照不足の影響で、着色よりも果肉の熟度が進むことが懸念されるため、地色や硬度を見ながら、適期収穫に努める。
- (2) 樹冠内が混み合っている場合は、支柱の手直しや追加等を行い、枝同士の間隔を十分に空けるようにするとともに、余分な徒長枝を切り落とし、樹冠内部や下枝まで日が射し込むようにする。
- (3) 降雨・曇天が続くと、りんご黒星病やももの灰星病、西洋なしの輪紋病など、果樹全般に病害の感染・発病が多くなるため、防除間隔に留意し、晴れ間を逃さず適期防除を行う。
- (4) 発病した葉や果実等は伝染源となるため、早期に取り除いて圃場外に持ち出し処分する。



りんご:黒星病

6 野菜・花き

- (1) 大雨による水の浸入を防ぐため、圃場周辺の排水溝等を点検する。また、多湿で病害の発生が多くなることから、側枝や下葉を除去し通風を良くするとともに、施設栽培では、換気の徹底や循環扇、加温機の送風利用による空気の循環に努める。
- (2) 果菜類では、着果負担軽減のため不良果を中心に摘果を行い、必要に応じて葉面散布剤等を散布し草勢の回復を図る。
- (3) 光量不足になりやすいため、整枝、摘葉を適正に行い、採光をよくする。ただし、降雨直前や降雨中の整枝、摘葉は控える。
- (4) ばらやゆり等の施設花きでは、日照不足でブラインドやブラスチング等の発生が懸念されるので、天候に応じた遮光管理に努める。特に、ばらやアルストロメリア等では、採花本数を確保するため、株元まで光が十分に入るように、弱小枝（茎）の除去等を行い受光の改善を図る。
- (5) 曇天日が続くと、植物体が軟弱徒長気味の生育となるため、薬剤散布は涼しい時間帯に実施し、薬害の発生に注意する。



なす:圃場滞水後の生育不良
(令和2年9月)

7 飼料作物

- (1) 飼料作物の生育停滞、湿害及び刈り遅れ等で、収穫量の減少や品質低下の恐れがあるため、気象及び生育状況に応じた適切な肥培管理、排水対策や収穫調製を行う。
- (2) 収穫が遅れる場合には、添加剤の使用等で良質なサイレージ調製に努めるとともに、飼料分析を行い、品質を把握した上で適切に飼料を給与する。また、適期に追肥を実施し、次回の収量確保に努める。